

2025年度 UNITY 武専・UNITY 特別昇格考試 論集

※「秀」論文より、選出しております。

UNITY 武専論文

川崎柿生道院 南 佳典

縁起と自己確立 ―少林寺拳法における原始仏教の継承―

■参考文献

- 『少林寺拳法奥義』／東京書店
- 『金剛禅読本』／一般社団法人 SHORINJI KEMPO UNITY
- 『少林寺拳法教範（上巻）』／初代師家宗道臣・一般社団法人 SHORINJI KEMPO UNITY
- 『卍とハーケンクロイツ』／現代書館
- 『釈尊の教えと現代科学』／株式会社パレード

■目次

- はじめに
- 日本における仏教
- 釈尊の教えと原始仏教
- 卍について
- 最後に

【本文】

1. はじめに

少林寺拳法は、精神・身体・知性を調和的に鍛える修養法であり、技術を磨く「易筋行」と精神修養の「鎮魂行」とを両輪としている。われわれ拳士は修練において技術面に偏りがちであるが、金剛禅すなわち釈尊の根本の教えを学び実践することも求められる。昇級や昇格時には学科課題が課され、これが他の武道にはない特色であるが、学科の学びは一過性となりやすく、僧階向上に関心を示さない拳士も少なくない。

筆者自身、入門の動機は優れた技に魅了されたことにあったが、次第に金剛禅の思想的深みを知るに至った。武専に所属して技術を磨く過程で、開祖法話や教範学習を通じて指導者から多くを学び、金剛禅や釈尊の根本の教えへの関心を一層深めた。

本論文では、そうした経験を踏まえ、仏教、とくに釈尊による初期仏教の教えについて整理・考察する。

2. 日本における仏教

聖徳太子は、中国大陸の隋から伝来した

仏教を篤く信仰し、その興隆に尽力した結果、仏教思想は十七条憲法にも活かされた。その後、多くの仏教者によって日本独自の仏教が形成されたが、その基盤には中国仏教、すなわち「大衆の救済という新しい思想」が打ち出された大乘仏教の影響が色濃く残っている。こうして、日本の仏教は次第に死後の救いや死霊のたたりを説き、極楽浄土への往生を願う宗教として一般に受け止められるようになった。

中世以降、日本の仏教は武力により統制され、幕藩体制の維持に利用された。さらに明治期には神仏分離や廃仏毀釈によって大きな打撃を受け、第二次世界大戦後になってようやく、人々の安心や世界平和への貢献という新たな役割を模索し始めた。しかしながら、今日においても多くは葬式中心の仏教にとどまっているのが実情である。

その一方で、明治中期以降に進められた原始仏教研究の成果は特筆すべきものである。仏教には多くの宗派があり、それぞれに宗祖が存在するが、研究の進展によって釈尊という「教祖」の存在があらためて注目さ

れ、その生きた姿や教えが鮮明に再現されるようになったのである。

3. 釈尊の教えと原始仏教

釈尊が説かれた仏教には、「人間をはるかに超えた力をもつ創造神や、宇宙の運行を司る存在、祈祷・呪術・神秘的な力」などは一切登場しない。ある宗教学者は、この点において釈尊の根本の教えは他の宗教と大きく異なると指摘している。

釈尊が悟りに至る過程には、学すべき点が多い。記録によれば、釈尊は「瞑想によって感情や思考を止めれば欲望は一時的に鎮まるが、瞑想をやめれば元に戻ってしまう。したがって、それは最終的な解脱には至らない」と考え、単なる「思考停止のための瞑想」を退けた。そして、徹底した思索を通じて智慧を獲得し、その智慧によって生存欲を自覚する。それによって、根源的な生存欲を減するという考えに至ったのである。また、苦行についても「極端な禁欲により心を鍛え、力づくで欲望を抑える試み」であると断じた。苦行によって確かに欲望は大きく減少した。しかし、完全に消滅することはないことに気づいたのである。釈尊は、肉体を痛めつけることはかえって精神の働きを損なうと悟り、他者から蔑まれようともその修行法を断念した。こうして苦行が悟りの道ではないと見極めた釈尊は、断食をやめて川で身を清め、村の乙女から供された食事を受け入れて体力を回復させた。その後、菩提樹の下に静かに座し、深い瞑想に入った結果、悟りを成就したのである。

悟りの瞬間において、釈尊は「諸法実相（現象界の真実の姿）」を体得し、法（真理）が顕わになり、自らが覚者となったことを自覚した。その真理に基づき順序立てて思索を重ね、縁起の理法によって苦が生じる過程を明らかにしていった。

なお、初期仏教の教え（四諦・八正道・十二因縁など）は、後代において過度に整理・体系化されたものであるとする指摘もある。実際の釈尊の説法はもっと素朴で、相手の状況に応じて的確に語られたものであつ

たと考えられる。釈尊は人びとに身近で理解しやすい教えを説きつつ、次第に仏教の核心へと導いていったのである。また、釈尊は誰をも権威として仰ぐことはなく（無師独悟）、弟子たちにも自分のいうことをよく理解せよとは言ったが、自分を権威として仰げとは言わなかった。この点で、釈尊は実践哲学者であったと解釈されている。

ものごとは原因と条件（縁）との関係によって生じ、また消えていく。この「縁起の法則」を、釈尊は普遍的な「法（真理）」であると説いた。人間がいつ、どこにいても守るべき永遠の理法が存在すると考え、それを「法」と呼んだのである。その原語である「ダルマ」は「たもつもの」という意味を持ち、人間としてあるべき姿や人倫の規範をも示している。

原因があれば結果が生じるという「因果律（因果の法則）」は、自然科学の基本原則でもある。しかし、仏教における縁起の法則は、単なる「因→果」ではなく、「因・縁→果」という形で示される点に特徴がある。原因を直接原因（因）と間接原因（縁）とに分け、どのような原因でも必ず同じ結果を生むとは限らず、結果はそのとき与えられる条件によって大きく変化すると説いているのである。

釈尊が目にした人生の苦しみは「四苦（生・老・病・死）」および「八苦（四苦に加えて、愛するものとの別れ、憎む者との出会い、求めるものが得られないこと、そして人間の存在を構成する五つの集まり〈五蘊〉そのものが苦であること）」である。その苦しみの原因は自分の思い通りにならないことから生じるものであり、「渴愛（欲望・煩惱）」と「無明（根本的な無知=智慧の欠如）」にある。人は過去の行為（業）の報いによって現在苦しんでいるのであり、現在の行為を正せば未来にはより良い生を送ることができる（自業自得）。そして、煩惱の束縛から解放された境地こそが「解脱」である。また、釈尊は教えを筏にたとえて、彼方の岸にわたるのには状況に応じてもっとも適切な筏で行けば良く、さまざまな教えは同一の

目標に導くと説かれた。このことは、仏教には三位一体や最後の審判の日が来て裁きを受けるといったようなドグマは存在せず、異説を排除するという考えも希薄であることを示している。

4. 卍について

卍は金剛禅の象徴として用いられている。道院では、正面に梵字で「卍ダーマ」と書かれた開祖の掛け軸が掲げられている。その意味は、裏卍に象徴される理智と力によって自己を完成し（自己確立）、表卍に象徴される慈悲をもって衆生に奉仕する（自他共楽）という表裏一体の道を示すものである。相反するものの調和を表すこの両卍こそが「力愛不二」の正信であり、門信徒は大調和の世界を自己の努力によって実現することを目指して修行している。

仏教では、卍は釈尊の胸に現れた瑞相とされ、インドでは幸福と功德をもたらす法印と考えられてきた。日本にも仏典伝来とともに右回りの卍が伝わり、寺院や地蔵堂などに広く用いられて仏教の象徴となった。卍は生命の根源や流動する宇宙を表す記号であり、相反するものの調和という「陰陽」の思想に立脚している。天と地を結び、陰と陽が合一するとき、大いなる力が生じ万物を生き育てる。この卍の意味は、まさに金剛禅の教えの根本である。

しかし、20世紀、卍はナチス・ドイツによって「ハーケンクロイツ」として利用され、反ユダヤ主義や戦争の象徴とされてしまった。第二次世界大戦後、卍は誤解と偏見の対象となり、仏教徒でさえ使用を控えざるを得なくなった。もともと卍にはナチズムの意味はなく、古代ユダヤ教の礼拝堂や初期キリスト教においてもシンボルとして用いられていたことが知られている。それにもかかわらず、神聖な仏教の象徴は汚名を着せられ続けている。

このため少林寺拳法では、2005年、国際的に統一された新しいシンボル「ソーエン」が作られた。ソーエンも卍と同じ意味を持つが、仏教徒が二千年以上守り伝えてきた卍

が不当に傷つけられている現状には戸惑いや憤りが残る。ゆえに金剛禅の門信徒は、歪められた卍の正しい意味を自らの手で広めていく責務があるといえるだろう。

もともと、仏教は本来、シンボルに執着することを戒めている。しかし、シンボルは人びとを真理に導く助けとなる。西洋では「悪を消すことが善」と考えるが、東洋では「悪は善を知らせるもの」ととらえ、悪を超えてこそ真の善が生まれると説く。卍はまさに、この「転じて善となす」という教えを象徴する記号なのである。

5. 最後に

少林寺拳法を修行する者は皆、「達磨の子」であるといわれる。釈尊の法灯を継いだ祖師達磨の教えは、過去から現在、そして未来の人間社会においても重要な意味をもち続けるだろう。達磨は釈尊の根本の教えを伝えるために禅門を開き、開祖宗道臣禅師はその精神を受け継ぐことを決意された。そして我々は開祖の志のもとに集い、「釈尊の自己確立の教え」と「不屈の達磨精神」に学んでいる。そこから自主性を確立し、いかなる困難にも耐え抜く精神力、そしてそれを支える健康で強靱な身体を養わなければならない。これこそが、私たちが『現代に生きる達磨の教え』を継承し、未来へと伝えていく道である。